

ある外国語指導助手（ALT）の挑戦をめぐって ～「校長室だより」から～

校長 深谷 浩一

今年度の「校長室だより『つれづれなるままに』」の第15号（令和元年12月24日発行）から第20号（令和2年2月21日発行）まで6回にわたって「ボランティアって何だろう」と題して「ボランティア活動に対する生徒の意識の比較」を取り上げた。そのきっかけとなったのは、22年前に本校に赴任し、県内の外国語指導助手（ALT）や彼らが勤務する学校の生徒など総勢400人を動員し大洗海岸での「クリーンアップ作戦」を展開した、アメリカ出身のALT、トッド・フラリー先生のボランティアに関する意見を紹介したことであった。（『つれづれなるままに』第15号、第16号参照。）

『つれづれなるままに』第17号では、このトッド先生の意見に対して、当時の生徒たちが書いた賛同の意見や反論を紹介した。続く第18号では、カンボジアの選挙監視員として国連ボランティアとして従事した中田厚仁さんや特定非営利活動法人として「かものはしプロジェクト」を始動させた村田早耶香氏らの活動を紹介した。その中で「茨城・ネパールに学校をつくる会」を立ち上げ、12回にわたりネパールを訪問し、現地に学校を設立すべく募金活動に奔走した平井廣二氏の功績についても紹介した。それは、20年以上前に本校の蒼星祭でネパールの実情を語ってくれたこの平井氏が、現在本校に勤務する進路指導主事の平井先生の父親であることを知ったからでもある。

『つれづれなるままに』第19号は3年1組の生徒たちの意見をまとめたものである。思いがけずに昔本校でともにチームティーチングで指導したトッド先生を紹介する機会を得たこと、そして今の生徒たちがトッド先生の考え方をどのように感じたのかを授業の中で取り上げてくれたことに対して、鈴木先生には心から感謝したい。

最終号では、22年前にトッド先生に対して行った質問と同じ質問を今年度赴任したばかりのALT ジョージ・グロイエンズ先生に投げかけてみた。（本紀要「ボランティア活動に関する質問に答えて」（外国語指導助手（ALT）ジョージ・グロイエンズ）参照。）ジョージ先生は、「日本の高校生は自己中心的で、成熟していないからボランティアをしないのだ」と言い放ったトッド先生の意見を否定したうえで、本校生に推奨するボランティア活動を具体的に列挙してくれた。極めて建設的な意見に感動した。

ボランティア活動はしないよりした方が良いに決まっているが、だからといって活動すればそれでよいというものでもない。活動を強制するのではなく、何気なく行った活動に満足感を得られるような経験を生徒にさせたい。試しに行った活動によって思わぬ人に感謝されるような体験を生徒にさせたい。そんな経験こそが、そんな体験こそが、たとえ卒業した後であっても地域社会の中で活動することに喜びを感じられる人を創る原動力となるのではないかと、今はそんなふうに考えている。

つれづれなるまゝに 第15号

令和元年12月24日（火）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（1）

～ある外国語指導助手（ALT）の挑戦～

平成8年8月、本校にトッド・フラリーという、アメリカはコロラド州出身の外国語指導助手（ALT）が赴任しました。その前年の4月に赴任し、英語教師として2年生の国際コースを担当していた私は、「ALTの世話係」として、授業のことやアパートのことなど生活一般にわたって面倒をみる仕事を担当することになりました。

当時の中央高校には「国際コース」があって、特に英語の専門科目が多く、私のほとんどの授業はトッド先生とのTT（ティーム・ティーチング）となったのです。たとえば、3年生を対象とした英語の専門科目「外国事情」や「英語表現」などが選択科目としてあって、決まった教科書がないので、雑誌やその日の英字新聞の記事から教材を作成し授業を行っていたことを憶えています。

トッド先生は、ユーモアがあり、笑いのある楽しい授業を心掛けていましたが、やる気や意欲のない生徒に対しては、職員室に呼び出しては英語で怒鳴りつけるような厳しい面も持ち合わせていました。「遅刻した生徒をどうして授業の途中で教室に入れるのか。」「生徒のレベルはアメリカの小学生以下だ。先生方はどうしてもっと厳しく指導しないのだ!」と先生方に対しても厳しい姿勢で対峙したのです。昔、日本が太平洋戦争で敗北したとき、日本統治の責任者として来日したGHQのマッカーサー元帥は、「日本人の知的レベルはアメリカの12歳の子供と一緒だ。」と言い放ちましたが、トッド先生もまさにこの勢いだったのです。誰に対してもこんな調子なので、同僚の先生方からも多少顰蹙（ひんしゆく）をかったりもしましたが、彼の言い分にはもっともなことも多く、「他人がどう思おうと自分が信じた道を突き進む」といった、きわめて「アメリカ的な」ALTでした。

「我々ALTは、国際運転免許をもっているのに、どうして車による出勤や出張が認められないのか。」と訴え、私を困らせたこともありました。「規則だから仕方がない。」というばかりの私では、埒（らち）があかないと考えたのか、トッド先生は、自分の権利を認めさせるために、単身県庁に直談判に行ったこともありました。トッド先生のこうした努力の甲斐あって、現在では、ALTの先生方が自家用車を使うことについての規制は随分緩やかになりました。

「環境保全に関心のある人、この指止まれ！」

～「大洗海岸クリーンアップ作戦」始まる!～

こんな行動的で自己主張の強いトッド先生がある時、仲間とともに大洗サンビーチの空き缶拾いのボランティア活動（彼はそれを「大洗海岸クリーンアップ作戦」と名付けました。）を計画しました。当時、県内で勤務していた同じ立場のALTに声をかけ、そのALTたちが自分の職場の生徒たちに声をかけ、総勢400名のALTとそれぞれの学校の生徒たちが、平成9年4月29日の「地球の日」に大洗海岸に集結することになったのです。本校でALTを担当していた私としても、休日とはいえ、生徒たちだけで参加させるわけにもいかず、中央高校の10名程度の生徒たちとともに参加することになったのです。

しかし、彼はどうして、そんな行動を思い立ったのでしょうか。彼を空き缶拾いに駆り立てたものは何だったのでしょうか。私はそのことに大いに興味をもちました。そこで、その思いを彼の口から語ってもらうことにしたのです。それが「地球の日－大洗にて」（原題は“EARTH DAY-OARAI”。）です。その内容は次号で紹介します。（つづく）

つれづれなるまゝに 第16号

令和元年12月26日（木）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（2）

～「こんなきれいな海をどうして平気で汚せるの？」～

トッド先生の企画を賞賛し、ともに大洗海岸のクリーンアップ作戦に参加した私は、その企画の意図などを改めてトッド先生から聞いてみることにしました。それをまとめたのが以下の「地球の日—大洗にて」でした。

【ボランティアに関する実践報告】

地球の日—大洗にて

Todd Frary

英語指導助手、茨城県立中央高等学校

1996年の秋、私は友人たちと共に人気のある大洗の浜辺を歩いた。すがすがしい日に素晴らしい景色を眺めることを期待して出かけたのだ。しかし、そこで見たものは想像していたものとはかなりかけ離れたものであった。

浜辺はそれこそ汚れていた。見渡り限り、砂の上には「き」が投げ捨てられていた。私たちはみな嫌気がさし、同時に日本人に対する怒りさえ感じた。環境に対してこれほどまでに無関心に、どうしてこんなに美しい海岸を汚せるのであろうか。ゴミのほとんどは偶然落とされたというより、むしろ長い夏の期間にわざと捨てられたものだった。

その日、私たちはまた夏が来る前に再びこの浜辺にやって来て、出来るかぎりたくさん友達とともにここを掃除しようと決心したのである。私たちはこの問題を水戸で行われた茨城県JET（Japan Exchange Teacher: 外国人招致事業で来日している外国語教師）の会議で持ち出した。そしてそこで、参加者100名に大洗の状況について知らせ、私たちのボランティア活動に対する理解と協力をお願いしたのである。

私たちの計画は実現した、当初の期待をはるかに越えて。茨城県国際交流協会（the Ibaraki International Association）や県庁の国際交流課（the Prefectural International Affairs Division）の協力を得て、県内の各校、各団体にこの計画への参加を呼びかけた。JETのメンバーも勤務する学校でポスターを使ったり、この大洗の問題を授業の中で取り上げて、生徒たちに知らせた。たとえば、私の場合、大洗で撮影したビデオを授業の中で見せたりもした。

そもそも私たちは大洗を一つの例として、環境に対する意識の高さを日本人に、そして茨城に住む外国人に示したかっただけである。私たちの目標は、想像していた以上の情熱に迎えられて見事に達せられた。計400名の人々がボランティアのクリーンアップ作戦に参加してくれたのだ。97年4月29日、地球の日（Earth Day）のことである。長さ2キロにわたる浜辺の清掃には8時間以上かかったが、どの人も一日中生き生きと活動していた。

大洗海岸クリーンアップ作戦が大変な成功を収めたので、私たちとしては将来も同じような行事を組織的に行うことを決めている。できれば毎年地球の日に。そして県内の他の場所でも手助けを必要とする地域があれば、是非取り組みたいと考えている。

この報告をお読みになって、たぶんみなさんは私たちが感じたことの素晴らしさを感じていただけるでしょう。将来は私たちのお手伝いをしたいとさえ、お考えの方もおられるかも知れません。しかし、もしみなさんが「その話をする」（talk the talk）のなら、（つまり、何かをしようとするのなら）、どうぞ「実際に歩いて」（walk the walk）（実際に行って）みてください。私たちも将来はみなさんに是非お手伝いいただきたいと考えているのです。直接水戸市の茨城県国際交流協会にお問い合わせいただいても結構です。電話は、029-241-1611です。

さらに「その話をする」（talking the talk）とか、「実際に歩く」（walking the walk）ということに関して言えば、まずはどうか身の回りの環境に優しくしてあげてください。今度誰かがゴミを投げ捨てるのを見かけたら、「茨城の『環境を愛する友』がとてもがっかりしますよ」、とやさしく声に出して注意してあげてください。そしてもっと大切なことは、あなた自身もその一人であることを教えてあげることです。

（トッド・フラリー／深谷 浩一訳・茨城県立中央高等学校特活部）

これを読んだ私は、これが単なる『ボランティア活動記』ではないことに驚きました。というのは、そこには「環境問題に対する意識の高さ」「高尚なボランティア精神」とともに「日本の高校生、さらには日本人全体に対する痛烈な批判」を秘めていることを直感しました。そこで、それをさらに詳しく知りたいと思い、トッド先生とのインタビューを試みたのです。それが「EARTH DAY - OARAI」という記事に添えられたインタビュー記事です。

私はこれを3年生を対象とした選択科目「時事英語」か「英語表現」の中で扱ったように記憶していますが、これを読んだ生徒の反響は、想像以上に大きなものでした。



生徒とともに大洗海岸にて。左端がトッド先生、右端は筆者。

「トッド先生の言うことはもっともだと思う。」「トッド先生のような先生が日本にいないのが残念。」「こんなことを教えてくれる先生が増えればいいと思う。」、あるいは「こんな意見をもっと早く知りたかった。そうすれば私の高校時代はもっと別のものになったと思う。」などなど、トッド先生に対して肯定的な意見が多かったのも私にとっては驚きでした。というのも、前号で紹介したように「日本人の知的レベルはアメリカ人の12歳と同じだ」と言い放ったマッカーサー元帥に対するのと同じ感情を、私は当初トッド先生に対しても抱いていましたが、「日本人は幼稚だ。大人になっても電車の中でマンガを読んだりポケモンで遊んでいる。そんな大人が高校生に対して「成熟した (mature) 大人」になるための教育などできるわけがない。」と断言したのです。しかし、その時の私は、「日本の教員」として多少なりともカチンときて、「そこまで言わなくても・・・」という思いは抱いても、「それは誤解だ。日本人はあなたの言うほど、幼稚ではない。その証拠に・・・」と強く反証することも、残念ながらできなかったのです。



さて、ここで、改めてインタビュー記事でのトッド先生の主張を整理してみたいと思います。(この記事については、『ボランティア活動の日米比較～トッド・フラリー氏に聞く～』参照。)

- (1) アメリカの高校では、環境に対する考え方を学び、その考え方に基づいて実践(ボランティア活動)することが求められる。
- (2) アメリカでは、大学入試において、ボランティア活動の経験が重視されている。
- (3) 日本人がボランティア活動に参加しない理由は、
 - ① 社会的な責任を学ぶ場がないために、自己中心的になってしまうから。
 - ② 日本の高校生は幼稚(「社会参加の点ではアメリカの12歳と同じ。」)だから。
- (4) アメリカでは、高校生は社会から「若い大人」と見なされ、大人の活動に参加したり、大人の責任について学ぶことを期待されている。日本の高校でも、生徒を大人扱いし、生徒にもっと社会的な責任を負わせるべきである。



ごみ拾いに取り組むトッド先生

- (5) 日本の教師は、しつけなど親の仕事は親に返し、学校では学校としてなすべきこと(社会的な責任を学ばせるなど)をなすべきである。

これらのトッド先生の指摘は、あれから20年以上が経過した現在でも、耳を傾けるに値する意見ではないかと思われます。

次回は、これらの主張に対して、当時の生徒達がどんな反論を展開したのかについて、詳しく掘り下げてみたいと考えています。(つづく)

つれづれなるまゝに 第17号

令和2年1月7日（火）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（3）

～「生徒をもっと大人扱いするべきだ！」～

前号までに、20年以上前、アメリカコロラド州出身のトッド・フラリー先生が本校で外国語指導助手（ALT）として勤務していたこと、彼は大洗の海岸を訪れ、その汚さに驚き「大洗海岸クリーンアップ作戦」を企画したこと、その企画には、県内で勤務するALTや生徒など400人以上が参加したことなどについて、お話ししました。その後、トッド先生はその時の経緯を「地球の日一大洗にて」で報告し、さらに、インタビューの中でボランティア活動についての考え方を示しました。その中では、「日本の高校生は幼稚だ」「日本人は高校生だけでなく、大人も幼稚だ。」などと挑発的な表現が使われていましたが、発言の趣旨は「日本の高校では、生徒をもっと大人扱いするべきだ。」ということであり、多くの生徒たちの共感を得ることができました。

とはいえ、生徒の中にはトッド先生の意見に対して露骨に反感を示すものもいたようです。今回は、そうした少数派の意見も含めて「当時の生徒達を感じたこと」を、当時私が担任したクラスで刊行した冊子（『翼の軌跡』（平成9年度中央高等学校第3学年6組発行））から拾ってみたいと思います。

「ボランティアについての事は少しずつだけど、その波紋はやがて大きな波になると思う。（S. I）」

「授業でない授業という感じで、興味深かった。例えば、アジアの苦しんでいる人たちに何か送りたいと思っても私たちは一体どうしていいのかわからない。学校でも詳しく知っている人はたぶんいると思う。そういうことを紹介してもいいと思う。（N. K）」

「深谷先生やトッド先生のような先生がもっとふえてほしい。いい事教えてくれる先生がいて本当によかった。感謝しています。（H. I）」

これらは、多くの生徒たちが抱いた、授業に対する率直な意見だろうと思われます。生徒たちはトッド先生の指摘を肯定的に捉え、「自分にできることはないか」と批判に対して前向きに受け止めようとしていたのではないかと思います。ボランティア活動に対しても前向きで、「人のために自分にできることをしたい」と願う生徒たちがたくさんいたからなのではないかと思います。

そうした生徒たちに対して学校ができることは、もっとボランティア活動に係る情報を生徒たちに提供し、生徒たちがより社会性を身につけるためのお手伝いをする事だと思います。

挑発的なトッド先生に対しては、逆に、反発を覚え批判的な意見を述べた生徒もいました。もう少し生徒たちの声に耳を傾けてみます。

私を変えたボランティア活動

横 梨

私は将来福祉関係の仕事をしたいと思っています。そのきっかけとなったのが、ボランティアでした。もしそれがなかったら、今夢もなくつまらない毎日を送っていたかもしれません。でも私はまだ人間的にできていないと思うので、大学に入学して自分を成長させ、人間的に大きくなりたいと思っています。そんな私もみんなにもっとボランティア活動に参加してほしいと思っています・・・が大学に入学するのに、就職するのに有利だからという理由だけでボランティア活動に参加してほしくありません。でももしきっかけがそうであっても、何度かやっているうちにその気持ちは変わってくると思うのです。私はそんなにたくさんボランティア活動をやってきたわけではありませんが、活動をするたびに多くのことを学んできました。それでもやっぱり、まだまだ学ぶべき事はあると思うのです。そのために私は大学生になりたいと思っています。今の私のまま社会に出て働くというのはまだ無理だと思うからです。それはトッド先生のいう成熟さや社会的な責任がないということかもしれません。

私は高校生という時期は人間としての土合を作っている最中であると考えています。学校嫌いの私であるけれど、ちゃんと学校に通っているのは、そういう考えが自分の中にあるからです。そんな私はたまにふかつくことはあっても、嫌いな人は誰一人としていません。なぜなら、人は良い所も悪い所もあることを知っているからです。私は今回のトッド先生の意見は日本の悪い所しか語っていないように思うのです。次回もしこういう機会がありましたら、是非日本の良い所も見つけて語って下さい。日本だって良い所があります。そして今以上にずっと日本を好きになってください。

ではこれからもお仕事がんばってください。また会う日まで・・・。

ボランティア活動をきっかけとして、将来福祉関係の仕事をしたいと思うようになったというM. Kさん。自分を成長させてくれたボランティア活動を人に勧めるのは、それは大学に入るためとか、就職に有利だからという理由ではなく、トッド先生の言う「成熟さ」や「社会的責任」を身に付けるためだと理解しているようです。とすれば、もうすでに十分「成熟した」大人としての考え方が身に付いていると言えるのではないのでしょうか。

さらに、トッド先生の意見が「日本の悪い所しか語っていない」ので、日本の良い所も見つけて、「今以上に日本を好きになってください。」などと日本に対する理解を促しているところは、実に成熟した大人としての対応です。今の言葉で言えば、「神対応」と言ってもいいかも知れません。

続いて、もうひとつ、トッド先生に対して批判的な意見を紹介します。

日本の文化を知って！

S. K.

私は「ボランティア・サークル」と呼ばれている団体に所属していますが、日本のボランティアについて言うと、はっきり言ってバカみたいです。高校生で集まるというつぶざけた団体になりそうですが、その逆で県や市からの決め事が厳しかったこともあって「ボランティアをするまじめでしっかりした子（高校生）の集まり」っていう自意識ばかり強く、本来の活動そっちのけで会員の服装だとか言葉遣いばかり気にしている団体でした。そんなんだから、ボランティア活動となると、「あの人はよくできる」とか「あの人はだめ」とか評価する人が出てくる始末。ボランティア、ボランティア言っていて結局自分達自

身ボランティアってどんなものかわかっていないんです。

私は3年間やって自分なりのボランティア持っています。私のボランティアは、例えば自分の棚を通りかかった人が荷物を落とした時に拾ってあげることです。そんなとても簡単で、誰にでもできることでいいんです。それをボランティアって呼ぶべきなんじゃないかな。

それを考えて言わせてもらえば、日本人にはしっかりとボランティアの精神があります。少なくともまったく持っていないわけではないんです。先生の国ではどうかなんて知りません。行ったことないし。先生の目から見て日本人がどんなに腐っているように見えようとも、ここは先生の生まれ育った国とまったく違う歴史をたどってきた、まったく別の一つの国なんですよ。

他人の欠点を見つけることって、良い点を見つけることより簡単なんだから知ってましたか。先生の言っていることは、確かだろうと、そうでなかろうと「言っではいけないこと」です。（この際断言させていただきます。）国際化って言いますよね。その社会で一番大切になってくるのは、「お互いの文化を認め合う」ってことなんです。私のいとこはタイ人で、今日本の高校に通うために私たちと同居していますが、私ははじめその生活の違いに驚きました。暇があるとテレビを観て、ゲームをして、日曜日ともなると1日中もテレビの前にはいます。彼の国ではそれでよかったんです。しばらく私は彼の生活を見るのがイライラしていやで、いつも怒っていました。だけどそれが文化の違いだとその時理解したんです。だから先生の気持ちも判らなくもないんですが。

国を出て日本に来ている以上は日本の文化をよく知らなくてはと思います。受験についても、今の流行についてもそうです。日本がどんな歴史を持っていて、日本人はどんな考えを持っていて今の文化になっているかをどうしても理解に苦しむのなら、とっとと自分の国に戻ってもう一度と外国へなんかが行かなければいいと思います。

受験について言わせてもらえば、私もいろいろ不満はあるが、この国では大学出なくてはろくな仕事もないし、仕事がないってことはどこぞの橋の下に段ボールのお家を作るということで、しかもその苦しみはちゅと血のつながった親戚にまで影響する。あの人の親戚に「るんべん」がいるって風に、日本は狭いのでそういう噂は大問題なんです。私にしてあげれば、大学は別に仕事のためだけに課ではないんですけど、とにかく行って学びたいことがたくさんあって、でも大学受験にはまったく意味がないように思われる勉強まで必要で、「〇〇大学に受かるための勉強」なんて自分でやっても無駄だなあと思いつつも、自分にはこの受験制度をどうすることもできっこないし、どうしても大学には入りたいから、大学合格した後の自分のために今必死でやってるんです。

私は他の人が受かろうと落ちようと知りません。自己中心的と言われようと何と言われようとかまわないけど、他人にぐかにされるような生き方だけはしていません。

「ボランティアって何だろう？」と、ボランティア活動の本質を問うような意見です。これを書いたS. Kさんは、「自分にはこの受験制度をどうすることもできっこない」と言っていますが、20年前私は、S. Kさんには、大学に進学して「受験制度に物言える」ような人になってもらいたいと、『翼の軌跡』の中でコメントしました。トッド先生に対して、失礼な表現も見られますが、いずれ成熟した「大人」になれば、それも改まることでしょう。さて、最後にもうひとりだけ紹介します。

「Todd先生の授業も深谷先生の授業も大好きでした。本当に大切なことを教えてもらったような気がします。Todd先生のプリント読んで、うちの親、一度は『うん、そうだね』って言ってました。でもその後で『でもあんたはそれよりも勉強しなくちゃいけない』って言われました。このままじゃ何も変わらないようで、すごく怖いんです。どうすれば変えていくことができるんでしょうか。何かを変えようとするのってすごく難しいですね。(Y.O)」

この生徒は、当時私が気にかけていた「生徒たちは、学校で学んだことを次の世代にどう伝えていくのだろうか。」という問いには、多少悲観的に、社会の理解が得られていないことを嘆いています。

あれから22年。今の生徒の皆さんは一体どう考えるでしょうか。（つづく）

つれづれなるまゝに 第18号

令和2年1月31日（金）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（4）

～ボランティア活動20年の歩み～

22年前、アメリカ出身のトッド先生の見解に対して、本校の生徒がどのように感じ、どのような反応を示したかについて、前回までにご紹介しました。

さて、この22年前のトッド先生の見解に対して、現在の生徒たちは一体どのように感じるのでしょうか。今回、鈴木先生が英語の授業の中で3年1組の生徒たちに尋ねていただきましたので、それらをご紹介しますと思います。

しかし、その前に、この20年間の日本におけるボランティア活動の状況について概観しておきたいと思います。

「国連ボランティア」に脚光！

1993年、今から27年前の4月、内戦後のカンボジアで選挙監視員として奮闘していた国連ボランティアの中田厚仁（あつひと）さんは、公平な選挙が行われることを妨害しようとするゲリラグループの銃弾に倒れました。25歳の若さでした。

それまでも青年海外協力隊（JICA）などの海外でのボランティア活動は紹介されていたものの、日本国内にボランティア活動に対する関心が高まったのは、この事件がきっかけであったように思われます。



中田厚仁氏（wikipediaより。）

阪神・淡路大震災を契機に



国連ボランティアの中田厚仁（あつひと）さんがカンボジアで凶弾に倒れた2年後の1995（平成7）年1月17日、日本では、兵庫県南部・淡路島北部で最大震度7、死者行方不明者数6,437名という、未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災が発生しました。今月の17日で発生以来、丸25年となりました。

この震災を契機に数多くのボランティア団体が生まれ、活動を始めたのもこの時期でした。

2002年、「かものはしプロジェクト」始動！

2002年（平成14年）7月18日に任意団体として設立された「かものはしプロジェクト」は、児童買春問題の解決をミッションに掲げる特定非営利活動法人でカンボジアを拠点として活動を始めました。農村の貧困が児童買春の一因であるとの考えから、職業訓練と雇用の場の創出を通じて親や子どもたちの経済的な自立を目指しています。現在、青木健太氏、村田早耶香氏、本木恵介氏の3名が共同代表を務めています。

東南アジアの児童買春問題を啓発する活動を続けていたフェリス学院大学の学生村田氏と持続可能なビジネスモデルによって社会問題を解決する事業を起こしたいと考えていた東京大学の学生青木氏、本木氏の3名が任意団体として設立した組織。2004年（平成16年）9月に特定非営利活動法人の法人格を取得し、カンボジアで本格的にボランティア活動を始めました。



村田早耶香氏（Wikipediaより。）

平井廣二氏、「茨城・ネパールに学校をつくる会」設立！



平井廣二氏

ネパールのヒマラヤを訪れた際に、貧しい生活のため教育を受けられずにいる住民の存在を知り、「茨城・ネパールに学校を造る会」を設立して、ネパールに学校を作るために尽力した人がいます。中学校長を退職後、1995年（平成7年）に「茨城・ネパールに学校を造る会」を設立、寄付を集め、同国のシンドパルチョーク郡に8校の小・中・高校を建設したのです。この人の名は、平井廣二（ひろじ）氏といいます。

「教育の場を提供することは、子ども達の命を守ることだ」と信じて活動し、本校で開催した文化祭「蒼星祭」にもネパール人とともに訪れ、学校が不足しているネパールの状況などについて語ったり、パネル展示

等も行ったりして、来校者に募金の必要性を訴えていました。当時私は生徒会を担当し、本校の窓口となっていたので、精力的に活動していた平井さんのことはよく覚えています。

2007年（平成19年）、平井さんはそれまでの功績を認められ、公益財団法人 社会貢献支援財団から社会貢献者表彰を受賞しました。その時の「受賞の言葉」は以下のとおりです。

教育を受けられないネパール山村の住民の生活は、貧困、搾取、人権、健康、食との闘いです。学校建設、教育の享受は人々の願いであり、夢です。私達茨城のNGOは、ネパールの学校建設地まで足を運び8つの学校を建設しました。この活動を止めてはいけないと思います。副賞は今後の活動資金とし有効に使いたい。（公益財団法人 社会貢献支援財団のHPより。）



ネパールの子供たちの登校風景

（Wikipediaより。）

平井氏の足跡

平井さんは1977年（昭和52年）、茨城大学学術調査隊の隊長として、ヒンズークシ山脈のウドレン・ゾム中央峰の登頂を成し遂げました。その際、現地の宗教、教育などについても調査を行った結果、子供達が自分の名前すら書けない実態を知り、教育の重要性を痛感したそうです。多くの子供達が野外で学んでおり、文具も足りない状態であることを知り、「自分にできることからやってみよう」と活動を始め、1995年（平成7年）に「茨城・ネパールに学校をつくる会」を設立したのが、始まりでした。

会として、募金活動で集まった約150万円で老朽化が激しかったダルモダイ高校の新校舎の建設に着工すると、平井さんは、その後12回にわたりネパールを訪問し、現地調査を重ね、小中高8校の学校建設に携わってきたのです。「栄養や医学の知識がない母親が子育てに困ったり、計算が分らない父親が給料の計算をごまかされたりする。知識があれば、食べるのに困ったり、子供を売らざるを得なくなることもなくなるでしょう。学校に行くのは知識を得るためだけでなく、命を守るためでもあるのです。」と平井さんは話しています。

平井さんの活動は、学校建設だけでなく、ユネスコ協会が主管するパタンアシュラム（母子自立施設）にいる子供達への食費援助やマイティネパール（人身売買で売られた子供を連れ戻し、国内で自立のための教育を行う施設）への食事援助と教育教材の支援などネパール訪問の度に広がっていったのです。

◇ ◇ ◇
このような素晴らしい日本人がいることを私たちは知るべきです。特に、最後に紹介した平井さんは極々身近にいる方で本校とも深く関わり、皆さんの先輩方に対してボランティア活動の大切さを語ってくれました。ちなみに、現在本校に勤務している平井先生は、この平井廣二さんの息子さんです。（つづく）

つれづれなるまゝに 第19号

令和2年2月17日（月）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（5）

～大事なのは「人の役に立ちたい」と思うこと～

さて、22年前に本校のALT、トッド先生の意見（別添『ボランティア活動の日米比較～トッド・フラリー氏に聞く～』参照。）に対して、3年1組の生徒たちは一体どのように感じたのでしょうか。箇条書きではありますが、鈴木先生の問いに対して、生徒が答えてくれた意見を紹介します。生徒は日本語と英語の両方で答えてくれました。なお、全員の意見をタイピングしてくれたのは、クラスの井上 稀翔君です。ありがとうございました。

（山本 彩乃さん）

日本人は自己中心的だというのが、日本人は落し物があれば交番にとどけ、困っていたら知らない人でも助けてくれる心の優しい人が多い。

The Japanese are said to be egocentric, but a lot of people can report lost articles to the police station. In addition they can help people who are in trouble. There are a lot of people with tender heart.

（久松 愛士さん）

日本の高校生は、自分のことばかり気にして、社会のことなどは一切目を向けないことが問題です。

Japanese students just care about themselves. The problem is that they do not look at the society at all.

（野田 慎也さん）

私は日本の高校はもう少し勉強以外にも力を入れていいと思う。

I think Japanese high school should focus more on activities apart from studying.

（山崎 航太郎さん）

日本では他人のことを考えないで自己中心的な考えを持っている人がいる。

Many people are self-centered without thinking about other opinions in Japan.

（鳥居塚 美結さん）

その学校になぜ行きたいのか、ちゃんと目標を持った上で絶対に合格するという気持ちが強い。ただ合格したいだけではない。

Japanese students have a strong will to pass the exam once they have a goal. It's not just because they want to pass it.

（加藤 乃彩さん）

先生は生徒を子供扱いしすぎている。

Teachers treat students like little children too much.

(岩田 麗加さん)

私も高校時代にボランティアの経験をしたほうがよいと思う。なぜなら、何のためにする必要があるのかを理解することができるからだ。しかし、卒業のために必修すべきではないと思う。

I think we should gain volunteer experience during high school, because we can understand what we need to do. However, we shouldn't make it compulsory to graduate.

(郡司 千尋さん)

日本人は、他の人と違うと必ずツッコまれる。

Japanese people are criticized if they do something different from others.

(佐々木 千智さん)

ボランティア活動だけではなく、アルバイトのような活動でも経験することで高校生に大人として振る舞いを期待できると思う。

I think we can expect high school students to behave as adults not only through volunteer activities but also through other activities like part time job.

(浅野 智穂さん)

先に社会に出ている学校の先生に社会参加の仕方を教えてほしい。

I want school teachers who have gone out into the world to tell me how to participate in the society.

(市ノ澤 綾乃さん)

ボランティアはやればよいという問題じゃないと思う。自分からやろうと思わないと意味がないと思う。

I don't think whether we participate in volunteer activities or not is a matter. I think it's meaningless if I don't want to do it.

(塚野 和真さん)

社会人になった時、学校から社会という変化に耐えられると思う。

I think that when I become a member of society, I can adjust myself to the change of my environment from school to society.

(山口 詩織さん)

ボランティア活動することが絶対的に“責任ある大人”につながるとは限らないと思う。

I think that participating in volunteer activities may not lead students to have a sense of responsibility.

(倉坂 弥優さん)

ボランティアはやるべき。なぜならボランティアをすることで人々のためになるから。例えば、ゴミ拾いをするのは環境にとって重要である。

I think we should participate in volunteer activities, because they are for the people. For example, if we clean our city, the environment will improve drastically.

(大峰 遥さん)

いい大人になるためには何か大切なものを犠牲にしなきゃいけないのか？私はそうは思はない。

To be a good adult, do we have to give up something important for us? I don't think so.

(石井 綾乃さん)

私は、考えが未熟な10代の内に、大人として扱うのはよくないと思います。悪い大人になってしまう可能性もありえると思う。

I don't think it's good to treat teenagers with immature ideas as adults. I think it could make them worse.

(遠藤 望妃さん)

進学や就職での競争力をつけるために学校側が参加を勧めるのも良いが、ボランティアは人を助けるためにあるのだと思う。一番大事なのは本人が「人の役に立ちたい」と思うことである。

It is good for school to encourage students to be competitive in job hunting and further education. However, I believe we should participate in volunteer activities in order to help people. The most important thing is that students want to do something for others.

(杉本 光陽さん)

ボランティアは強制的にやらせるものではない。

Volunteering should not be forced to do.

(高木 颯大さん)

たくさんの失敗を通して、自分自身で学んでいくものを、わざわざ学校で協調していかなくてもよいと思う。

I don't think we have to emphasize social responsibility at school because we can learn them by ourselves naturally through various mistakes.

(井上 志乃さん)

日本の教育は自己中心的になることではなく、一つのことを最後まで成し遂げることの大切さを勧めているのだと思う。

Education in Japan does not encourage students to be self-centered, but tells the importance of accomplishing one thing to the end.

(大波 由季さん)

学校は勉強をする場だ。しかし日本の学校は厳しい規則が多すぎる。

A school is a place to study, but a Japanese school has too many strict rules.

(伊藤 美桜さん)

子供っぽいものが好きだから子供だというのはおかしい。自分が好きなものを他人に否定される意味が分からない。

It's wrong to call high school students "children" because we like childish things. I don't know the meaning of being denied by others because of what we like.

(金杉 蒼生さん)

課題を多数決で決めるのはあまり良い方法ではないと思う。少数派の意見も取り入れ、改めて考えるべきだと考える。

I don't think it's a good way to decide on a task by majority vote, because we need to take the opinion of the minority into account think about the matter again.

(福士 直也さん)

学校で、社会に貢献する方法を学べるように年間行事としてボランティア活動を実施するべき。

So as to learn how to contribute to our society at school, students should participate in volunteer activities as an annual event.

(富田 真琴さん)

ポケモンやハローキティを子供のものと考えているのか？私はそう思いません。

Do you think Pokemon and Hello kitty only belong to children? I don't think so.

(小池 優由さん)

若くして大人になることがそんなに大事！？子供時代にしか学べないことだってあるんじゃないの！？

Is it so important to be an adult when you are young!? There are things you can only learn as a child!?

(飯田 七海さん)

趣味は大人の振る舞いと関係ない。

Hobbies have nothing to do with matured behavior.

(畠山 杏月さん)

子供扱いされているとしても、社会のルールを教えてもらえる。

Even if we are treated as children, we can learn the rules of society.

(皆川 直樹さん)

ボランティア経験が重視される風潮は日本に必要であると思う。自然を大切にする心を養うべきだからである。

It is necessary in Japan for the experience of voluntary work to be highly evaluated, because we should develop a heart to take good care of nature.

(大槻 真愛さん)

教師が計画と運営に関わらないのはいいことだ。

It is good that teachers are not involved in planning and management.

(荒木 愛梨さん)

生徒がすべきことは、生徒自身に考えさせるべき。

The teacher should have the student think about what students should do by themselves.

(川澄 大河さん)

ボランティアなのに、1日しかなかったら出られない人もいるのにペナルティーがあるのがおかしい。

I think it's weird to have a penalty, because if they have only one day some volunteers can't join it.

(佐久 理絵美さん)

日本とアメリカで文化が違う。

Japanese and American cultures are different.

(井上 稀翔さん) ※クラス全員分の意見をタイピングしてくれた生徒さんです。

裕福な人は自分の周りの環境しか見えていない。だから本当に貧しい人の苦しみを知らない。

Wealthy people only see the environment surrounding their own. So they don't really know the suffering of the poor.



様々な意見を寄せていただき、ありがとうございました。どの意見が正しくてどの意見が間違っているということはありませんが、杉本光陽さんが指摘してくれたように、ボランティアは強制的にやらせるものではありませんし、遠藤望妃さんの言うとおりの「ボランティアは人を助けるためにある」のであって「一番大事なのは本人が『人の役に立ちたい』と思うこと」であることは間違いありません。また、日本では受験勉強を強いることによって、「自己中心的な人間を育てている」というトッド先生の意見に対して、「日本の教育は自己中心的になるのではなく、一つのことを最後まで成し遂げることの大切さを勧めているのだと思う。」と日本の教育の在り方を弁護した井上志乃さんの意見はきわめて印象的です。

今回は、22年前のトッド先生の意見が、今年度赴任したイギリス出身のALT、ジョージ先生の眼にはどのように映っているのか、また、トッド先生が「幼稚」だと一蹴した日本の高校生はどのように映っているのかなどについて、話を聞いてみようと思います。(つづく)

つれづれなるままに 第20号

令和2年2月21日（金）発行



校長 深谷 浩一

ボランティアって何だろう！（6）（最終回）

～ボランティアを部活動で！～

22年前に本校に赴任し、ゴミだらけの大洗海岸に失望し、400人以上の県内のALTや生徒を動員してボランティア活動を展開したトッド先生の考え方を紹介することからスタートしたこのシリーズもいよいよ佳境を迎えました。

最終回の今回は、今年度本校に赴任したばかりのジョージ先生に対して、22年前にトッド先生に対して行った同じ質問を行い、その回答を比べてみたいと思います。「A」にはジョージ先生の回答を、（参考：Todd）には、22年前に行ったインタビューでのトッド先生の回答を、そして、[筆者のコメント]欄には、筆者としての私のコメントを記載しておきます。

Q：あなたは高校時代に何らかのボランティア活動の経験がありますか？

A：イギリスには、「エジンバラ公爵賞」を獲得するという特別なチャレンジ企画があります。14歳から24歳までの若者が参加できる企画で年間30万人が参加しています。「探検」「技能習得」「スポーツ」「ボランティア活動」の4つのセクションに取り組むことになります。つまり、年間30万人の若者がこの国のどこかでボランティア活動を行っていることになるのです。いろいろな活動があって、チャリティショップや図書館で働く人もいれば、放課後子供たちに勉強を教えている人もいます。また、施設で働いている人や子供たちにスポーツを教えている人もいます。こうした経験はとても役に立ちますし、何より楽しいのです。

（参考：Todd）

私の卒業した高校では、卒業の必須条件として「3年生用研究課題」に取り組むことが義務付けられていました。「3年生用研究課題」とは、学年として地域社会の中で取り組むべき課題を一つ選び、それに取り組むことです。・・・私たちの場合は、学校近くのコロラド州立公園内のゴミ拾いをするものでした。

[筆者のコメント]

アメリカでもイギリスでも高校生のボランティア活動は推奨されており、実際多くの高校生が在学中にボランティア活動の経験があるようです。アメリカのトッド先生の学校ではすべての3年生に取り組むべき「3年生用研究課題」が与えられ、それが卒業のための必須課題となっています。イギリスのジョージ先生の学校では特に強制はしてなくても、多くの生徒が「エジンバラ公爵賞」に取り組み、「ボランティア活動」の領域では、学校以外の施設等で希望に応じたボランティア活動を「楽しみながら」行っているとのことでした。

この「楽しみながら」というのが一つのポイントで、単なる「苦役」の労働であつたら「また、やってみよう！」とは誰も思わないかも知れないからです。

Q：学生時代にボランティア活動の重要性について教えるような授業がありましたか。もしあれば、それはどんな授業でしたか。

A：学校では、ボランティア活動を強制されることはありませんでしたが、先に紹介した「エジンバラ公爵賞」の取組に参加するように強く勧められたことはあります。ボランティア活動を行うことが将来自分たちにとっていかに役に立つ経験になるかについて、何回も集会が開かれました。私の学校では「探検」を2回もやりましたが、これは決して普通のことではなく、すべての学校でやっているわけでもないのです。

私が通った学校では、クラブ活動の一部として、ボランティア活動を行う機会を提供してくれました。これも稀なことではありましたが。

校外での活動では、多くの生徒はスカウトに参加しています。46万人のメンバーを有し、ボランティア活動も強く勧めています。事実、スカウトに関わっている11万人の大人たちはすべてボランティアなのです。

また、別な選択肢もあって、「連合士官候補生部隊」(Combined Cadet Force)、略して「CCF」というのですが、ここでは、生徒たちは軍隊の規律やリーダーシップを学ぶことができます。陸軍、海軍、空軍のいずれかに参加することになります。

(参考：Todd)

私の高校では、ボランティア活動の重要性に関する特別な授業はありませんでしたが、「3年生用研究課題」の準備に際して、その問題を話し合うために集会所で何回か学年集会を開きました。・・・卒業するためには「3年生用研究課題」に取り組むことが求められました。というのも高校時代にボランティア活動の経験をもつ生徒を求める大学や会社は年々増えているからです。私たちの高校では卒業の必須要件として、研究課題に取り組む日を課していましたが、もし私たちが大学や就職の志願にあたって競争力をつけたいと思えば、自分自身でそれ以上のことをするべきだというのが学校の考えです。推薦された活動は多岐にわたっていましたが、どんな活動を選ぶかは基本的に生徒に任されていました。学校は私たちにもできそうな何十ものアイデアを載せたリストを作って提供してくれました。

[筆者のコメント]

ジョージ先生によると、イギリスではボランティア活動が強制されることはなかったようですが、とても大切な活動であるという認識のもとに、「強く勧められる」ことはあったようです。また、校外の活動としては、ボーイ・スカウト等の活動は一般的で多くの生徒が参加しており、大人になっても、今度は指導者としてスカウト活動に参加しているようです。ジョージ先生は、生徒にボランティア活動を行わせるには、「機会」と「動機」が大切であると述べています。そして、それを行う場は、「部活動」が最も適切であると言っています。

トッド先生の学校では、高校時代にボランティア活動の経験をもつ生徒を求める大学や会社は年々増えていることから「3年生用研究課題」が卒業要件となるなど、学校としてもボランティア活動の経験は重要視しているようです。ただし、活動内容は基本的に生徒の選択に任されているようです。

Q：近年、日本の文部省（現文部科学省）は他人への思いやりの気持ちを育てるために高校でのボランティア活動の重要性を強調しています。しかしながら、多くの学校では大学の入学試験に合格するための知識や技術を生徒に教えることだけに躍起になっているというのが現実です。・・・このような状況をいかがお考えですか。

A：日本における入学試験は高く評価されていて、社会も入試を中心に廻っているというのが現実でしょう。私も生徒たちが前もって試験問題を渡され、その質問に対する解答を準備してどうすればその解答を覚えているかに躍起になっているかを見たことがあります。しかし、これは正しい学習法ではありません。これは、イギリスでは、「カンニング」と見なされるような勉強法ですが、それが日本では試験で高得点を取ることがどれほど大切かを示してもいるのです。

こんな理由から、私は先生方の中にはボランティア活動を煩わしくて不必要なものと考えてる人もいることはよくわかります。実際、試験や部活動やアルバイトの合間に生徒たちにはボランティア活動なんてやる暇なんてありますか。たとえ、その時間があつたとしてもどうしてボランティア活動をする必要があるのでしょうか。それは（１）機会、と（２）動機の問題です。

もしあなたが生徒にボランティア活動の「機会」を与えようとしたら、最良の答えはその活動を部活動にすることです。こうすることで生徒たちは試験とかアルバイトに煩わされることなく地域社会に貢献することができるのです。つまり、生徒たちはボランティア活動を行う時間を見出す心配がなくなるわけです。

ボランティア活動を行う「動機」を見つけることはむしろ簡単です。ボランティア活動は生徒の経歴にとっては素晴らしいものだし、学校としては、「エジンバラ公爵賞」に似たようなものを取り入れることもできるからです。

ボランティア活動の本当の価値はその活動を経験することなのです。ガーデニングの仕事からは将来その道で仕事を行うための貴重な技術を学ぶことができますし、小学校で働く経験をすれば教師になるための鋭い洞察力を身に付けることができるのです。いずれにせよ、新しい人に出会うことは将来仕事を行う上で大切なことなのです。

部活動としてボランティア活動をうまく行えば、生徒にとっても学校にとっても素晴らしい機会となるでしょう。

（参考：Todd）

まず日本の高校生や先生方ボランティア活動に参加しないことについて、率直な意見を言わせていただきます。日本には他人より自分のことばかり考える自己中心的な個人を生み出すような社会的な土壌があります。この国では入学試験に合格することに重点が置かれているので、生徒たちは価値あること、あるいは自分たちの教育（の目標）は試験で合格することだけだと考えるように洗脳されてしまうのです。彼らも彼らを教える先生方も社会的な責任を学ぶことの教育上の重要性に気づきません。そして「お前は試験に合格しなければならない！」と日々繰り返し繰り返し頭の中にたたき込まれます。が、「お前は責任ある大人になるにはどうしたらいいかを学ぶ必要がある。」とは言われないのです。

〔筆者のコメント〕

ジョージ先生は、日本の先生が普段行っている、「入試問題を使った解法演習」を「カンニング」に等しい勉強法だと言っています。これまでこのような発想は私にはありませんでしたが、確かに言われてみれば、自分で解法を考えもせずに、「正解」だけを見てそれをただ覚えるだけでは、「カンニング」に等しい行為と言われても仕方ないかも知れません。

また、ジョージ先生は先生方の中にボランティア活動を煩わしくて不必要なものと考えてる人がいることについて理解を示しています。「実際に、試験勉強、部活動、アルバイトの合間にボランティア活動を行う暇があるのか」と。さらに、「その必要性が本当にあるのか」と。

一方、トッド先生は、日本の高校生や先生方がボランティア活動に参加しないことについて、極めて攻撃的でした。「日本には他人より自分のことばかり考える自己中心的な個人を生み出すような社会的な土壌」があつて、「入学試験に合格することに

重点が置かれているので、生徒たちは価値あること、あるいは自分たちの教育（の目標）は試験で合格することだけだと考えるように洗脳されて」おり、「彼らも彼らを教える先生方も社会的な責任を学ぶことの教育上の重要性に気づいていない」と。

攻撃的であると同時に挑発的でもあったこの意見に対して、22年前の当時は、なぜかそれほどの怒りは感じず、むしろ爽快感すら覚えた記憶があります。それはおそらく、トッド先生が指摘したことが「的を得ている」と直感したからかも知れません。これを読んだ生徒からも、それほど大きな反発がなかったのもたぶん同じ理由かと思われます。

Q：日本の教育にとって最も大事なことは何だと思いますか。あなたの理想を実現するためにどんなことをしたいと思いますか。また、日本の教師に期待することは？

A：生徒たちはただちにボランティア活動を行うよう強制されるべきではありません。無理矢理ボランティア活動をさせたところで、彼らは頭にくるだけです。そのかわりに、先生方には生徒がボランティア活動を行うための動機を提供してあげてほしいのです。そうすればボランティア活動が楽しいものとなり、大人になっても続けていこうとする気持ちが芽生えてくるのです。

(参考：Todd)

日本の16歳から18歳の生徒たちは、私がこれまで見た中で最も成熟していない、幼稚な高校生です。「学力標準テスト」では高いスコアを示しても「社会参加」という点ではアメリカの12歳と同じです。アメリカの生徒たちは、麻薬、銃、強盗、妊娠といった悪い環境の中で育つため、成熟するのが早いとも言えますが、アメリカでは若くても大人 (young adults) だと見なされているという事実も否定できません。「若い大人」と見なされているから生徒は大人の活動に参加したり、大人としての責任について学ぶことを期待されているのです。

一方、日本の高校では生徒を子供扱いにし、彼らをそのように振るまわせています。アメリカでは親が負うべき種々の責任を、日本では担任の先生が負っています。基本的に日本では、親の仕事を教師が受け継いでいるようなものです。教師はさしずめ「昼間の親」といったところでしょうか。アメリカでは、親は高校生の息子や娘に、大人のように振る舞うにはどうすればよいかを教え、教師は学校で彼らをそのように（つまり、大人として）扱うのです。あなた方は生徒をボランティア活動に参加させたいとお考えですか。そのためには、大人になることが必要です。まず、ハローキティやポケモンやプリントクラブを取り上げてください。その次に、「若い大人」として振る舞うことを教えてあげるのです。・・・

[筆者のコメント]

ジョージ先生は、ボランティア活動は、強制して行わせるものでないと言います。そして、「生徒にボランティア活動を行う動機を提供してほしい。」と先生方をお願いしています。

一方トッド先生は、「日本の高校では生徒を子供扱いにし、彼らをそのように振る舞わしている」ことそのものが誤りなので、「親は高校生の息子や娘に、大人のように振る舞うにはどうすればよいかを教え、教師は学校で彼らをそのように（つまり、大人として）扱う」べきだと強調しています。

トッド先生の授業は、今思い返せば、とてもユニークでした。「いろいろな人の英語を聞く」授業では、大統領や俳優の物真似から、インド人や中国人の英語などを自分の声で録音してきて、「これはどこの国の人か」などと生徒に問いかけたりしたこともあります。とにかく楽しい授業でしたし、思ったことは率直に発言する人でした。それがトッド先生が生徒に好かれた大きな理由かも知れません。

Q：あなたの実践報告に何か付け加えることがあれば、遠慮なく述べてください。

A：私の前任者の中には、日本の高校生は自己中心的で成熟していないからボランティア活動をしなさいのだと言った人がいますが、この意見に私はまったく賛成できません。生徒たちの優先順位が違うだけだと思うのです。人が何かをするには動機が必要だというのは世の中の現実なのです。ボランティア活動がどんなに尊いことであってもたいていの人にとってはボランティア活動を行う理由がわからないというのが現実なのです。これは日本には当てはまりませんが、イギリスでのボランティア活動は、たいてい何かほかのことの結果として現れます。履歴書のために資格を取るとか、経験を得る手段とか、あるいはただ、それをする楽しいからとか。「それをするとなんか楽しくなる」というのが目的（ゴール）ではありますが、そこまで行くには時間がかかります。たとえば、スカウトのためにボランティア活動を行っている人はたいてい昔はスカウトを行っていたのです。

部活動としてボランティア活動に取り組む場合どんなことが考えられるか、アイディアをいくつか示しておきます。

- ・ 小学校のクラブ活動のお手伝いをする
- ・ 小学校で勉強を教える
- ・ 小美玉市内の家庭でガーデニングを手伝う
- ・ ケヤキ通り沿いの空き缶を拾う
- ・ 学校の清掃を行う
- ・ 落ち葉拾いや雪かきを行う
- ・ 学校のポスターを作ったり飾り付けを行ったりする
- ・ 地元の会社でボランティア活動を行う
- ・ ソーシャルメディアを運営する
- ・ チャリティ・イベントを開催する

(参考：Todd)

日本では教育課程の一環として社会参加の仕方を学んでいないし、親もそれを子供に身につけさせることに失敗しています。さらに、教師は生徒を子供扱いし、生徒に自分で考えさせることをしていません。だから、子供っぽい習慣が一向になくならないし、社会に関心を抱いたり、大人としての社会参加の在り方に興味をもったりする生徒が育たないのです。・・・私たちが日本の高校の中に教育上欠くことのできない重要な一部として、大人の社会的な対人関係や責任感を学ぶ場の必要性を強く訴えて初めて、将来に変化を見ることができるようなのです。

[筆者のコメント]

ジョージ先生は、トッド先生の「日本の高校生は自己中心的で成熟していないからボランティア活動をしなさいのだ」という意見を完全に否定しています。ボランティア活動は、強制して行わせるものでない」として、「生徒にボランティア活動を行う動機を提供してほしい。」と先生方に呼びかけています。

一方、トッド先生は、「日本の高校では生徒を子供扱いにし、彼らをそのように振る舞わせている」ことそのものが誤りなので、「親は高校生の息子や娘に、大人のように振る舞うにはどうすればよいかを教え、教師は学校で彼らをそのように（つまり、大人として）扱う」べきだと強調しています。

現在本校では、JRC同好会がボランティア活動を担当し、地元自治体、特に小美玉市の事業には数多く参加して活躍しています。ジョージ先生の意見では、部活動として実施している本校の形態が「最良の方法」ということになるのです。（おわり）